

するに地錦抄に、菝葜は荊の類なり、葉丸く柿の葉のちひさき如くにて、葉中に三の筋あり、冬葉落ちて春出づ、秋あかく實あり、俗にサンキライとも又はサルトリバラとも、いふ非なり、さるとりばらは葉の形槐の葉のごとく、花色本うこん花の長さ一尺ばかりにて、針大きくありて、各別の物なり、又の名をかめいばらともいふなり、近ごろ武州秩父の山中へまかりしに、農家客ある度に、小麦の粉を水に練り丸くちぎりて、此ばらの葉を兩めんよりあて、柏餅のごとくして、はうろくに焼きてもちとなし、饗應しぬ、葉をとれば餅に三條の紋見えてあいらし、猶しほらしくこしらへなさば、いかにいみじき物ならんとおぼえしまゝに、家の女あるじに、是はこの所の名物にや、此葉を用ふるも子細ありやなど問ひ侍るに、聲高に打ちわらひて、何條事の候はん、是を龜甲餅といふ、此葉をかめいばらと云ふ、葉の形龜の甲に似て、また齡を延ぶる大事の薬にも入るといへば、食して無毒といひ傳ふと答ふ、さればこそいさゝかの人のこと葉も捨てがたしとは、かゝることには、田舎人のいひすてに殊勝なる事もこそあれと、おもひ出づれば、實にや菝葜は、屠蘇の一味なれば、長壽の縁にもなるべしやといふに併せおもへば、西國の俗のみにはあらぬか、ある冊子に、大隅の片里にといひて、五月五日とて、松火あかしくなど、あるところに、女は柏の葉にて黒米の餅を包みけるは、これなん上がたに見しまこもの粽のかはりなるべきとあるなど見えたるにても、江戸のみのこと、も、思ひがたくもとより木の葉はすべてかしはといふこと、いにしへの詞なれば、いづれの木の葉にもあれ、餅つゝ、みたらんは、かしは餅となへんも難なかるべし、

〔江戸名物詩 初編〕龜屋柏葉餅 外神田旅籠町御成道

寶生門外暖簾龜、萬歲千秋柏葉棗、形小色白何足賞、喰來第一味憎宜、

〔嬉遊笑覽十食上〕近年隅田川長命寺の内にて、櫻の葉を貯へ置て、櫻餅とて、柏餅のやうに葛粉にて